

チャネルキャットフィッシュの導入試験

後藤悦郎

チャネルキャットフィッシュの当県での養殖魚としての可能性を探るため、昭和57年6月埼玉県水産試験場より1700尾のふ化稚魚を導入したが、今年度はそれを引き続き養成を行なったのでその概要を報告する。

飼 育 概 要

飼育池は当初屋外の30 m²池と280 m²池を使用し、コイ用配合餌料で飼育した。4月20日に30 m²池の26尾を測定した所、全長64～105 mm (平均85.3 mm)、体長48～87 mm (平均67.5 mm)、体重2.4～11.2 g (平均5.8 g)を得た。

5月9日に280 m²池の18尾を測定した所、全長95～151 mm (平均123.3 mm)、体長75～121 mm (平均98.6 mm)、体重7.0～27.3 g (平均15.2 g)を得た。

5月11日に30 m²池を全部取り揚げ計数した所、170尾を数え、これを全部5000 m² 素堀り池に収容した。また、5月13日に280 m²池を全部取り揚げ計数したが、740尾生残していた。これも全部前述の素堀り池に収容した。この素堀り池に移動したのは池中に発生する水生昆虫、小魚などを摂餌して成長するか否かを調べるためで、配合餌料は投餌しなかった。

9月28日に台風による大雨で河川が増水したため場内に大量の濁水が流入した。そのため水位が池壁上端より約30 cmほど上回り、相当数のキャットフィッシュが池外へ逃亡した。平水位に回復した時にそのうちの数十尾を回収して再度池内に放養した。

10月6日に素堀り池を干して取り上げた所、全部で221尾を得た。5月の放養時が910尾であったので、病気による斃死、鳥類による食害があまりなかったとすると約 $\frac{3}{4}$ が9月28日の台風で逸散してしまったことになる。取り揚げ分については平均体重を測定したが51尾平均で47 gとあまり成長しておらず、魚体もヤせていた。従って池内の小動物はあまり利用していなかったものと思われる。魚は取り揚げ後塩酸オキシテトラサイクリンで薬浴し、280 m²飼育池へ再度収容した。その後はコイ用配合餌料を投餌して越冬に備えた。